

児童文学を読む会 memo

— 童話を読むおとなの会 —

<http://albatross.soc.shimane-u.ac.jp/s-salon/bungaku.html>

事務局 (中野) Tel/Fax 0852-27-7376 ninjin@dolphin.ocn.ne.jp

NO. 65

第67回例会 (13/12/19日)

アンデルセン

小泉八雲

「人魚姫」「雪女」

「人魚姫」終末部をどう読むか

- ・泡になって消えるなんて。自分を犠牲にして得られる幸せって何だろう？
- ・「人魚姫って素敵」と思っていたが、もう読みたくない。辛い思いだけが残る。
- ・憤り！人間の尊厳って何？条件付きでもらう……
- ・三百年で不死の魂をさずかるよりも私は「泡になって」死にたい (笑)
- ・この終末部は必要。論理的な部分。キリスト教的な終わり方。
- ・この時代 (1835 年頃) 子供のための読み物がはやった。アンデルセンにとって金になる仕事だった。最後の部分は付けたくて付けたわけではなからう。

人魚姫は不幸だったか

- ・悲しい話だと思っていたが、今回完訳を読んで、人魚姫は

不幸ではないと思った。

- ・人魚姫は外の世界に飛び出したかったのだ。「美しい少年の像」に恋し、「王子」に恋し、人間に憧れ、「不死の魂」を手に入れたいと願った。海の世界だけでは満足できない女の子が、自分で未来を選び取る生き方をした。
- ・中丸禎子さんも人魚姫に「意志を持った女」を見ている。



コペンハーゲンの人魚像
(K さん撮影)

気になるところがいっぱい

- ・「声」を取られた。一番良いものを失った。声を失うことがどんなことか分からなかった人魚姫が悲しい。
- ・「かわいのおしの拾いっこさ

ん」……名前がない。ペット同様。

- ・女奴隷と一緒に踊る。踊り子も周辺民族で、差別されていた。
- ・「花嫁の額にキスし、王子にもにっこりとほほえみかける」……ここの解釈は？……ふっきれたということか。

- ・最後の部分……「よい子」にほほえみかけ、「お行儀のわるい、いけない子ども」に涙をこぼす……こういった評価を書き込んだアンデルセンの意図は？
- ・人魚姫の、向こう見ずで、思い込みの激しい生き方は、若い人には違和感なく感じられるみたい。結末に悲しさや、はかなさ故の美を求めるのは、年取った私の読み？ (笑)

絵本「人魚姫」

- ・デンマークの人が絵を描いた絵本では、きれいな絵もあるが怖い絵 (泡になるところ) もある。
- ・絵本では多くの場合終末部がカットされている。
- ・子ども向けの文体。本来の「人魚姫」とイメージが違う。
- ・抄訳ではつじつまの合わないところが出てくるが、子どもは気にならないのだろう
- ・曾野綾子訳/いわさきちひろ 絵の絵本は「愛すること」を中心に絵本化されている。

巳之吉が 過去を語ったとき

お雪は、針しごとから目を
はなさずに、答えた。「そ
の方のお話をして下さい
な。」

- ・破局を迎えたくなかったら（お雪は巳之吉の発言を）止めれば良かったのに。
- ・女性の性（さが）か？
- ・巳之吉への不信感があったからか。
- ・お雪は人間の女になりきっていて、自分が雪女であったことを忘れていた（人間的な愛に生きていた）。
- ・霊界の掟に背いたものは消される。前段で巳之吉を許したときは雪女の姿のまま「くるりと背を向けて戸口から出て行った」（自分の意志で。そして翌年戻ってきた）。最後の場面では女は白い霧になって「震えながら煙出しの穴から外へ消えた（霊界の意志で消された）。

雪女も人魚姫も その愛を貫いた

あんたはは若くて可愛い。
助けてあげる。（中略）女は
まるで小鳥のさえずるよう
な快い声で挨拶を返した。

- ・雪女は霊界の掟を捨てて巳之吉への愛に生きようとした。（タブーが破られた時、巳之吉を殺せば霊界に戻れたらうに、雪女はその愛を貫いた）。
- ・人魚姫も海底を捨て（声を捨て、尾を人間の脚に替え）て王子への愛に生きようとした。（愛が成就しなかった時、王子を殺せば海底に帰れたのに、姫はその愛を貫いた）

（ロシア民話）

「ルサールカの石」と「人魚姫」

湖の妖精ルサールカは村の青年ワシリョークが好きになり、魔女に頼んで尾を

次回例会
2014年1月30日（木）
13:30～15:30
場所：井ノ下宅
（松江市黒田町）
作品：「クローディアの秘密」
（カニグズバーグ）

次々回例会
2014年3月13日（木）
13:30～15:30
場所：踐草書屋
（松江市上乃木）
作品：「お貞のはなし」
（小泉八雲『怪談』から）

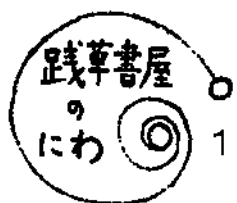
どなたでもお出でください
例会費＝各回 100円

脚に変えてもらって草原へ踊りに行く。魔女の条件は三つ。水から出たら二度と戻れぬこと、歩く時には痛みに耐えねばならぬこと、人間との愛が成就しなかったら、泡になって消えねばならぬこと。

ルサールカは痛みに耐えワシリョークと踊ることが出来たが、ワシリョークは鍛冶屋の娘のアレナと抱き合って去って行った。ルサールカは悲しみ、湖畔の石を抱いて闇に消えた。

（渡辺節子訳より抄録）

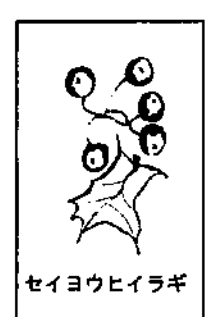
この民話はアンデルセンの「人魚姫」の原話か、その逆か。ロシア民話研究者の渡辺節子さんがある研究会で紹介されたものをK.Nさんが仕入れて来ていただきました。



踐草書屋
にわ

セイヨウヒイラギ

雪のなかで鈴なりの赤い実が美しい。いつまでも鳥に食べられないのは、実が苦いからだという。クリスマス飾りとして使われる。



セイヨウヒイラギ

松江では庭木として植えられているのを他に見たことがない。イランから地中海沿岸が原産。とげのある葉が国産のモクセイ科のヒイラギやヒイラギモクセイと似ているが、モチノキ科の木である。

（本文と挿絵はSさん、シリーズカットはIさんです）